

シ ッ ダ ー ル タ

井 ノ 川 清

はじめに

『シッダールタ』というヘッセの作品の中で中心的存在である「シッダールタ」なる人物は、ヘッセの精神的分身であるということができよう。この作品の中にはヘッセの宗教観、特に東洋の精神に対するヘッセの把握と仏教観が示されている。「シッダールタ」は「ゴータマ・ブツダ」と対比的に取り扱われている。このことによって、ヘッセは果して仏教をどのように理解したのか、一人の西洋人が東洋の精神にどこまで迫り得たのか、ということがおぼろげながら分ってくる。

シッダールタはいろいろに精神的遍歴を重ねるわけであるが、これを検討することによって、ヘッセのいかにも西洋人らしい面が浮かび出てくると同時に、西洋人をも乗り超えようとしたヘッセの精神的志向が明らかにされる。

しかしまたヘッセはこの作品を学術的に仏教の研究的叙述を行おうと思って書いたのではない。この作品はヘッセがヘッセ自身の宗教的体験をシッダールタに託して描こうとしたものである。この作品は二部よりなるが、一部と二部は同時に発表されたものではない。一部の発表と二部の発表との間には若干の時間的空白があった。それはこの作品が研究論文ではなくて、ヘッセの精神的体験の描出であることをもの語るものである。ヘッセは自分の宗教的体験が熟するまで続きを書くことができなかつたためであると推察してよいだろう。（この作品は1919—1922年に書かれた。）

以下にこの『シッダールタ』なる作品を読みすすめながら、ヘッセの精神的体験に基く遍歴するヘッセの宗教観を明らかにしてみよう。

1. 出家の動機

シッダールタはすぐれた学者を父に持ち、幼い頃から賢者に取り囲まれ、高度な精神的雰囲気の中で育った。彼はその環境の中で彼らから学べるだけのものを学んだ。しかし青年となるにつれ、彼の魂はいやしがない渇えを感じるようになった。そしてこの魂の渇えをもはや彼らによっては満たされないことを感じはじめ、ついに出家し沙門となる決心をする。彼にはゴーヴィンダという幼な友だちがいた。ゴーヴィンダは幼い頃からシッダールタを愛し、いつの日かシッダールタが出家することを予感していた。そしてその時にはシッダールタと行動をともしようと決意していた。ついにその時が来た。ある夜明けにシッダールタとゴーヴィンダは故郷を離れて苦行者たちの所に行くことになる。

シッダールタの出家の動機はゴータマ・ブッダの出家の動機とは異っている。ブッダはいわゆる「四門出遊」が原因となって出家の決意をしたといわれている。即ち東の門を出たとき老人に会い、南の門を出たときに病人、西門を出たときに死人、北門を出たときに修行者に会ったという。ブッダは老病死に会って苦悩を感じ、この苦悩の克服を考えるようになって、ニルヴァーナを求めて宮殿を去ることになったといわれている。また婦女たちの寝姿を見て無常を感じたともいわれている。ブッダには妻子があった。王子でもあった。いわば地上に於て人間が得られるすべてを享受できた身分であった。それなのにすべてを捨てて出家した。その動機は宗教的なものであったといえる。即ち「生」「老」「病」「死」の問題は古くて新しい問題である。今日にあってもいまだ解決されていない問題である。ブッダはこの永遠の問題を解決しようとして出家したのである。

シッダールタの場合、その出家の動機はブッダの動機に比べると似ているようで異っている。シッダールタはブッダと違って妻子はいなかった。富とか権力とか快楽とかをまだ知らなかった。彼は純粋に学究の徒であった。洋の東西を問わず、すぐれた青年が一時期抱く、飽くことのない真理への探究心、学問と知識への欲求、などが出家の動機となったのである。シッダールタはブッダと違ってまだ「苦」を知らなかった。従って「苦」の超克ということが出家の動機になったのではない。それは青年の抱く理想主義、向上心といったものであるといえよう。この点がシッダールタのその後の遍歴を大きく特徴づけるものとなるのである。

2. 苦行

シッダールタとゴーヴィンダは苦行者の所に行き同行と服従を申し出て受け入れられた。二人は苦行者たちのもとで修行をすることになるが、この修行というのはまさに苦行のことであった。断食をした。太陽の炎熱の中に焼けながら立った。雨に打たれて立っていた。いばらのつるの中にかがんだ。皮ふから血がしたたり、うみがしたたり落ちた。ではなにゆえにシッダールタはこのような苦行をしたのか。シッダールタの目標は、むなしくなること、渴えから、願いから、夢から、喜びと悩みからむなしくなることであった。一切の自我が克服され、心の中のあらゆる執着と衝動が沈黙したら、そのときこそ究極のものが、もはや自我でない本質の奥底にあるものが、大いなる秘密が目ざめるだろう、とシッダールタは考えた。

シッダールタは沙門たちのもとで自我から離脱する多くの道を歩むことを学んだ。滅我の道を歩んだ。しかし道は自我から離れていっても、その終りは常に自我にもどった。課せられた輪廻の苦悩をふたたび感じた。シッダールタはニルヴァーナに達しなかった。輪廻から脱出できなかった。冥想とか、肉体からの離脱とか、断食とか、呼吸の停止とかといった苦行

は、自我からの逃避、我であること苦悩からのしばしの離脱、苦痛と人生の無意味さにたいするしばしの麻醉にすぎない。世俗人の酒とかわりないと考えるに至る。

ブッダはニルヴァーナに達したとき、もはや苦行は必要でないと悟ったが、シッダールタはまだニルヴァーナに達しないうちに苦行の無意味さを感じはじめた。シッダールタはしだいに自我に目ざめてくるのである。即ちシッダールタは出家したときまで、完全に自我というものを知らなかった。自我の本当の悩みというものを知らなかった。自我の重荷を知らなかった。自我を克服したいという心の底からの願いを知らなかった。従って苦行しているうちに徐々に自我が目ざめだしてきたのである。

こんなときシッダールタとゴーヴィンダの耳に、自我を完全に克服し、輪廻から完全に離脱し、ニルヴァーナに達したゴータマ・ブッダのことが入った。ゴーヴィンダはブッダの教えをききたいと切に思ってシッダールタに迫る。シッダールタもゴーヴィンダほど熱心ではないが、これ以上苦行者たちのもとにいても無益であると考えていたので遂に同意して、ブッダに会いに出かけることになった。

3. ゴータマ・ブッダとの出会い

シッダールタとゴーヴィンダはゴータマ・ブッダの教えをきくためにブッダの滞在地へとやってきた。たくはつに出かけて行く多数の黄衣の僧たちの中にブッダも居た。シッダールタは一目みてそれがブッダであることが分った。シッダールタとゴーヴィンダはブッダのあとに従って町まで行き、そしてもどってきた。日がくれたときブッダは教えをといた。シッダールタとゴーヴィンダもきいた。ブッダは苦悩について、苦悩の由来について、苦悩を除く道について説いた。人生と世界は苦悩であった。しかし苦悩からの救いが見いだされた。ブッダは四諦を教え八正道を教えた。ブ

ッダの話が終った時、多くの巡礼者が教団に加わった。そして見よ、ゴヴィンダも歩み出て帰依し、受け入れられた。しかしシッダールタは動かなかった。ブッダの弟子にならなかった。

翌朝シッダールタは考えにひたりながら林園を歩いていたときブッダに出会った。シッダールタは勇気を出してブッダに話しかけた。この場面は『シッダールタ』という作品の第一部の圧巻をなすものといえよう。まずシッダールタはブッダが世界を因果によって作られた永遠の鎖として示したこと、世界の統一、一切の生起の連関、大小一切のものが同じ流れと因果生滅の同じ法則によって総括されていることを説いたことに賛意を表した。しかしついですぐにシッダールタは疑問点を表明する。それは万物の統一と首尾一貫がヶ所所で中断されており、小さいすきま小さい裂け目があるとあって、これは世界の克服の教え、解脱の教えであり、これによって永遠な統一的な世界の法則全体が破壊されていると異論を唱えた。

これに対しブッダは言った。

「知識をむさぼるものよ、意見の密林にたいし、ことばのための争いにたいし、みずからを戒めよ。意見は大切ではない。……私の教えの目標は、知識をむさぼるもののために世界を説明することではない。その目標は苦悩からの解脱である。」(S. 34)

シッダールタは返答する。

「あなたとの争いを、ことばのための争いを求めるために、私はこうしてあなたに話しかけたのではありません。……意見は重要ではありません。……あなたが目標に到達したことを、私は一瞬たりとも疑いませんでした。……しかしかくも明らかで尊い教えも一つのことを含んでおりません。つまり、覚者自身が、幾十万人の中で彼ひとりが体験したことの秘密を含んでいないのです。私が教えを聞いたとき、考え認識したのはそのことです。そのためにこそ私は遍歴を続けるのです。……いっさいの教えと師を去って、ひとりで自分の目標に到達するためです。」(S. 35)

シッダールタはさらに言い続ける。

「もし私があなたの弟子のひとりになりましたら、私の自我が、ただ外見的に、ただまやかさに安心に達し、救われるだけで、じつは生きつづけ、大きくなるようなことになりはしないか、と恐れます。そうなりましたら、み教えや、私の師事や、あなたにたいする私の愛や、僧団などを私の自我にしたかもしれないからです。」(S. 36)

このシッダールタの発言はシッダールタがまだ自我を克服し得ていないこと、それどころか自我そのものに目ざめてすらいないことを示している。ここにわれわれは典型的な西洋人を見る。われわれ東洋人にとっては自我の克服は比較的容易である。われわれは自我と社会の調和を求める。自我ばかり強調している人間はみなからきらわれる。また自我のみにくさ、我欲の無常さを知って自我から脱却することを求める。第二次世界大戦に於ても「滅私奉公」という言葉がさかんに言われて多くの日本人が天皇のために死んだ。

シッダールタはあれほど苦行し、そして最後にブッダの教えをきいても尚自我を克服しえていない自分を見い出す。従ってブッダの弟子になることはできない。

ブッダはシッダールタに「おん身は賢く語ることを心得ている。友よ。あまりに大きい賢明さを戒めよ。」(S. 36) と言って立ち去る。シッダールタは考えた。ブッダは自我の奥底に到達した人間だ。よし、自分も自我の奥底に到達することを試みよう。

この考えは西洋人特有の自我中心主義の思想をよく表わしている。

4. 自我の目ざめ

ブッダを去り、ゴーヴィンダを残し、シッダールタは林園を去りつづ一人考えた。

「お前が教えや師から学ぼうとしたことは何であったか、お前に多く教えた彼らがお前に教えることのできなかつたものは何か。……自我こそ自分がその意味と本質を学ぼうと欲したものだ。自我こそ自分がそれからのがれんと欲したもの、自分が克服せんと欲したものであった。しかしそれを克服することができず、それを欺き、それからのがれ、隠れることができるだけだった。まことに、この世のいかなるものも、この自我ほど、自分が生きており、一個の人間であって、ほかのすべてのものから分離独立しており、自分がシッダールタであるという、このなぞほど、自分の思いを悩ましたものはない。この世のあらゆるものの中で、自分について、シッダールタについて知るところが最も少いのだ。」(S. 38 f.)

この考えはわれわれ東洋人からみればまことに奇妙に見える。即ちわれわれは先ず自己を修養し究め確立することを第一となし、それが終えてのちはじめて天下国家の確立を、万人の救済を考える。しかるにシッダールタはあれほど苦行し修行して、ブッダの弟子になることさえしないほど高い境地に到達していたと思われたのに実は自我を克服するどころか、今頃になって自我に目ざめだしたのだ。東洋ではこのような人間は青くさいと言われて問題にされないだろう。しかし、西洋人にとっては一大発展なのだ。

シッダールタは更に考える。

「自分が自分について何も知らないこと、シッダールタが自分にとって終始他人であり未知であったのは一つの原因、ただ一つの原因から来ている。つまり、自分は自分にたいして不安をいだいていた。自分から逃げた／ということから来ている。真我を自分は求めた。梵^{ぼん}を自分は求めた。自我の未知な奥底^{から}にあらゆる^{から}殻の核心を、真我を、生命を、神性を、究極なものを見いだすために、自我をこまかく切り刻み、殻をばらばらにはごうと欲した。しかしそのために自分自身は失われてしまった。」(S. 39)

この考えもわれわれには極めて幼稚なものに思える。修行して自分自身

を見失うとは、その程度の浅い修行しかしなかったのかという思いが生じる。ブッダの悟りとは余りにかけ離れている。ブッダは自分自身を究め尽し、自我を克服し終え、輪廻から脱却し、ニルヴァーナに達したのである。このブッダにすら心から従う気になれなかったシッダールタの境地の余りに幼い、風にそよぐあしのようなか細い存在を進歩発展と取り違えるとは驚くばかりである。

シッダールタは次のように考えて一種の悟りを得たような気持になる。

「今はもう自分はシッダールタをとり逃しはしないぞ！もはや思索や生活を真我や世界の苦惱で始めるようなことはしないぞ。砕かれたかけらの背後に秘密を見いだすために、自分を殺したり、切り刻んだりはないぞ。……自分は自分自身について学ぼう。自分自身の弟子となろう。自分をシッダールタという秘密をよく知ろう。」(S. 39 f.)

自我に目ざめたシッダールタは輪廻の次元に引き入れられて流転しつづけるのである。ここで『シッダールタ』という作品の第一部は終る。

5. 輪 廻

ブッダとゴーヴィンダに別れ遍歴の旅に出たシッダールタは歩きながら考えた。彼岸の世界や現象の背後にある本質の世界を求めるのではなく此岸の世界、現象の世界そのものが美しい。自分は今や自分自身を体験しなければならない、と。

彼はある大きな町に着いた。そこで彼は林園に入っていく、召使をつれた行列に出会った。乗物の中に一人の女性がいた。遊女 カマーラであった。シッダールタは彼女から愛の術を学ぼうと決意する。そしてカマーラに会って話をすることができた。カマーラは私の所に来たければ、美しい衣服を身につけ、沢山のお金を持ってこなければならないとシッダールタに言う。シッダールタが読み書きできることを聞いたカマーラはシッダー

ルタに商人カーマスワミを紹介する。

シッダールタの読み書きの能力に驚いた商人カーマスワミはシッダールタを自分のもとにおいていろいろシッダールタに相談するようになった。シッダールタは次第に商売のことを習いおぼえて優秀な商人となってゆく。しかし商売は彼の目的ではなかった。目的は遊女カマーラにあった。彼は彼女にお金や贈物を持って行くのに商売が一番良い方法だから商売をやっているにすぎなかった。シッダールタはカマーラを訪れては彼女から恋の術を学んだ。そして遂にカマーラにシッダールタが一番すぐれていると言わせるほどになった。しかし遂にカマーラはシッダールタに「貴方は私を愛してはいない」(S. 69)と言う。シッダールタも「貴女は私を愛してはいない。もし愛していたら愛を技巧として行うことなどはできないはずだ」(S. 69)という。

シッダールタは金持になった。家と召使を持った。しかし徐々に彼は享樂の生活に溺れてゆくこととなった。酒をのむようになった。賭けごとをやるようになった。最後には彼が最も軽蔑していた金銭欲にとりつかれることになった。彼はけちになった。

やがてシッダールタに反省が訪れる。彼は俗人となったことによって、またその享樂の生活によって失ったものを知った。享樂の生活は一つの遊戯にすぎなかった。彼は遂にある夜、彼の家を去った。商人カーマスワミはシッダールタが盗賊の手におちたものと思って探させた。しかしカマーラは探させなかった。彼女はこの日のくるのを知っていた。この日から彼女はもう客を受けつけず、家を閉ざした。しばらくたって彼女はシッダールタとの最後の歓会のととき身ごもったことを知った。

6. 川

シッダールタは森の中の大きな川にたどりついた。彼にはもはや目標は

存在しなかった。嘔吐感だけがあった。彼は死にたいと思った。その時一つのひびきが聞えた。「完全なもの」或は「完成」というほどの意味を持つ神聖な「オーム」だった。「オーム」と彼はつぶやいた。忘れていたいっさいの神々しいものをふたたび知った。彼は深い眠りに沈んだ。眠りからさめると、そこにゴーヴィンダがいた。ゴーヴィンダとシッダールタは会話を交すがゴーヴィンダはシッダールタを理解しなかった。彼は立ち去った。眠りからよみがえったシッダールタは享楽の生活が善くないということを知識としてではなく、体験して知ったことをしあわせだと感じた。「知る必要のあることをすべて自分で味わうのは、よいことだ」(S. 90)と彼は考えた。彼は川をみた。川は何か特別なことを、彼のまだ知らない何かを、彼に語っているように思われた。

この川のほとりにとどまろうとシッダールタは考えた。この水から学ぼう。この水に耳を傾けよう、と彼は思った。この水とその秘密を理解するものは、一切の秘密をも理解するだろう、と思われた。シッダールタはこの川の渡し守ヴァズデーヴァの小屋に住むことになった。ヴァズデーヴァは傾聴することを心得ている点でたぐいまれだった。シッダールタは或る時彼にたずねた。「おん身も川から、時間は存在しないという秘密を学んだか」(S. 98) 彼はいった。「川にとっては現在だけが存在する。過去という影も、未来という影も存在しない。」(S. 98) シッダールタは狂喜して語った。すべての苦しみは時間ではなかったか。みずからを苦しめることも、恐れることもすべて時間ではなかったか。時間を克服し、時間を考えないようになることができれば、この世の一切の困難と敵は除かれ克服されはしなかったか。

歳月は過ぎ去った。あるとき多数の僧や信者がゴータマ・ブッダのいる所へ押しよせていった。ブッダの死期が近づいたとのことだった。多くの人々の中にかつての遊女カマーラが小さい男の子をつれていた。川のほとりでカマーラは蛇にかまれた。ヴァズデーヴァは小屋にカマーラを運んで

手当てしたがカマーラは手おくれであった。死につつあるカマーラはシッダールタにいった。「あなたは願いをかなえましたね？平和を見いだしましたね？」(S. 104) カマーラは完成された人の顔を見るために、その平和を呼吸するために、ゴータマのもとへ旅していこうと欲したが、ゴータマの代りにシッダールタを見い出したことをブッダを見たと同じようによかったと考えた。カマーラは永遠の眠りについた。シッダールタはその顔を見つめて、現在と過去も未来も同時だという感情、永遠の感情が彼の中にみちあふれた。深く、いつもより深く、彼はこのとき、あらゆる生命の不壊不滅と、あらゆる瞬間の永遠性を感じた。

7. むすこ

カマーラがつれてきて後に残した男の子は、シッダールタの子供であった。この子供は甘やかされ、ぜいたくの中に育ったためにわがままでどうしようもなかった。シッダールタに全然なじまなかった。しかしシッダールタは子供の心を得ようと愛と忍耐とをもって待った。子供に対する愛は次第に盲目的な愛情となった。彼は心配な余り痴人と同様になった。ここで分ることは、死にゆくカマーラがシッダールタに「あなたは平和を見い出しましたね」とまで言い、完成されたブッダに会うのと同じ喜びをカマーラに与えたほどに完成していたはずのシッダールタが、実はまだ決して完成されていず、平安に達していなかったということである。シッダールタは知識としてはおのれを愚かであると知っていた。しかし子供に対する俗人なみの盲目的愛情に悩んだ。遂に或る日、子供は小屋から脱出した。シッダールタはすぐに追いかけて、川を渡り森を通過して、かつてカマーラの遊園であった所まで追ってきた。しかしシッダールタはそこで次第に考えにひたりじっとすわって気持の落ち着くのを待った。彼はおのれの愚かさを体験的に知ることになった。やがてヴァズデーヴァが迎えに来た。二人

は小屋に戻った。

息子を失った傷はなお長い間うずいた。彼は前とは違った目で人間を見るようになった。思想や知識によってではなく、ひたすら本能や希望によって導かれている彼らの生活をともにした。彼らの煩惱のすべての中に、彼は生命を、生きているものを、破壊しがたいものを、梵を見た。シッダールタの心の中で、一体知恵は何であるか、自分の長い探究の目標は何であるか、ということについての認識と知識とが徐々に花を開き、熟していった。それは、あらゆる瞬間に、生活のさ中において、統一の思想を考え、統一を感じ呼吸することができるという魂の用意、能力、秘術にほかならなかった。

しかし傷はなおうずいた。ある日、傷がはげしくうずくとシッダールタは川を渡り、舟をおりた。町へ行き、息子を探すつもりだった。その時彼は川をみた。川は笑った。シッダールタは小屋に戻ってヴァズデーヴァにすべてを語った。ヴァズデーヴァは身動きもせず傾聴した。シッダールタが語り終わるとヴァズデーヴァはシッダールタをつれて川べに行つてすわった。シッダールタは耳をすました。彼は傾聴者になりきり、傾聴に没頭し、傾聴を究極まで学んだ。するとシッダールタの傷が花を開き、彼の悩みが光を発し、彼の自我が統一の中に流れこんだ。このときシッダールタの顔には悟りの明朗さが花を開いた。完成を知り、現象の流れ、生命の流れと一致した悟り、ともに悩み、ともに楽しみ、流れに身をゆだね、統一に帰属する悟りだった。ヴァズデーヴァは立ち上り言った。「私はこの時を待っていたのだ、友よ。その時が来たので、私は行かせてもらおう。」(S. 124) シッダールタは深く頭を下げ小声でいった。「おん身は森の中へ入るのであろう？」(S. 124) 「私は森の中へ入る。統一の中へ入る。」(S. 124) とヴァズデーヴァは光を放ちながらいった。彼は去った。深い喜びをもって、深い真剣さをもってシッダールタは見送った。

8. ゴーヴィンダ

あるときゴーヴィンダは、川のほとりに住み、多くの人々から賢者だと思われている老渡し守の話を耳にした。ゴーヴィンダはその渡し守に会いたいと思った。心の中では不安と模索が消えていなかったからである。渡し守はシッダールタであった。ゴーヴィンダは再会を喜こんだ。その夜シッダールタの小屋に泊ってシッダールタから今までの生涯の話をきいた。翌朝旅立ちの前にゴーヴィンダはたずねた。「おん身は教えを持っておられるか。おん身が生き、正しく行い助けとなる知恵を持っておられるか。」(S. 127) この間に対しシッダールタは答えた。「知識は伝えることができるが知恵は伝えることができない」(S. 128) と。そしてさらに、ことばは思想を完全に伝ええない。常に半分しか一面的にしか伝ええない、ことばに対する懐疑を表明する。また人間は全面的に神聖であるか、全面的に罪にけがれている、ということは決してない。そう見えるのは、時間が実在するものだという迷いにとらわれているからだ。時間は実在しない、と言った。さらにまたシッダールタは言った。「物を人は愛することができる。だがことばを愛することはできない。だから教えは私には無縁だ。愛こそ一切の中で主要なものである。」(S. 131 f.) ゴーヴィンダは言った。「覚者はわれわれに心を愛によって地上のものにつなぐことを禁じた」(S. 132) シッダールタは答えた。「ゴータマがどうして愛を知らないことがあるか。一切の人間存在をその無常において、虚無において認識しながら、しかも人間をあつく愛し、辛苦にみちた長い生涯をひたすら人間を助け、教えることに捧げたゴータマがどうして愛を知らないことがあるか。説教や思索にではなく、行為や生活の中にだけ私は彼の偉大さを見る。」(S. 133) ゴーヴィンダは心ひそかに考えた。ゴータマが涅槃に入って以後、これこそ聖者だ。と感じたような人には、ただの一度も会っていな

い。ただこのシッダールタだけは聖者だと思った。シッダールタは静かに微笑した。かすかに穏やかに微笑した。覚者が微笑したときそっくりに。深くゴヴィンダは頭をさげた。なんとも知れない涙が老いた顔に流れた。

おわりに

「教えは私にとって何ものでもない。私自身において学ぶことを私は欲する。」というのがヘッセの信条である。従って、シッダールタはゴータマ・ブッダの教えは理解したが、自らの体験においてブッダと同じ境地に達しようとして遍歴の生涯を続けたのである。また、「知識は伝えることができるが知恵は伝えることができない。」というのもヘッセの信条である。従ってことばの不完全さをヘッセは考える。これは極めて東洋的な思想である。

しかしこの思想があてはまるのは、極めて素質に恵まれたもの、エリート中のエリートにとってであって、一般衆生にはやはり導き手が必要なのではないか。例え師と同じ境地に達することができなくても、教えを説くことによって、またことばを費やすことによって師の境地の近くまで近づけるのではないだろうか。これは教育の根本に触れることなのである。教育とは弟子が向上するのを引き上げ導いてやることであるのだから。ブッダ自身悟りをひらいた時、心の中でこの悟りの複雑微妙さを考えて果してこの悟りを皆に語るべきかどうか、正しく伝えることができるだろうかと考えた。しかしブッダは結局は人々に語り、人々を救ったのである。ここにブッダの人間に対する愛がある。

ヘッセは、現在の時間の中に過去の時間と未来の時間とが同時に存在するという時間の同時性の思想を述べているが、これは時間は発展し進歩するという19世紀ヨーロッパ人の支配的な思想であった歴史主義の思想を反省したものであるし、時間を克服しようとしたヘッセの東洋に対する歩み

を示すものといえよう。ヘッセと同時代のヨーロッパ人の中には西欧の精神の行き詰まりを感じて、それを超克すべく東洋的なもの、特にインドに強くひかれた。ロマン・ロランもその一人である。『シッダールタ』なる作品はそのような一人のヨーロッパ人のインド（仏教）理解を叙述した象徴的な作品であるといえよう。

最後に一言ヘッセ批判を述べれば、この『シッダールタ』のように、もし最高の英知に到達したものが皆個人的な救いで満足してしまうとするなら、とり残された一般大衆はどうすればよいのか？やはり自分自身を完成させた人間は大衆を指導し大衆を向上させ大衆を救うのでなければならぬだろう。シッダールタの生き方もよく分るがやはりゴータマ・ブッダの生き方が、今日の世界に於て強く求められているといえるのではないか。最高の知恵を獲得したものは、その知恵を広く世界人類のために広めることが強く期待されているのである。

〔注〕 本論執筆に際して使用したテキストは、*Bibliothek Suhrkamp, Siddhartha Bd. 227* である。引用文末のページ数はこのテキストのページ数を示す。なお引用文の訳文は『シッダールタ』高橋健二訳、新潮文庫、を原則として使用した。また本論を書くにあたってこの訳書を全面的に参考にしかつ利用した。

(1984年6月26日受理)

Siddhartha

INOKAWA Kiyoshi

Die Person "Siddhartha" im Werk "Siddhartha" von Hermann Hesse ist der Doppelgänger von Hesse. In diesem Werk werden die Religionsanschauungen von Hesse, besonders sein Begreifen des östlichen Geistes und seine buddhistischen Anschauungen über den östlichen Geist, dargestellt. "Siddhartha" bildet einen Kontrast zu Gotama Buddha. Dadurch kann man annähernd verstehen, wie Hesse den Buddhismus eigentlich begriffen hat und bis wie weit er als Europäer dem östlichen Geist hat näherkommen können. Der Geist Siddharthas hat viel auf die Wanderschaft gehen müssen. Wenn man diese geistigen Wanderungen analysiert, fallen einem einerseits wohl die europäischen Seiten von Hesse auf, andererseits wird aber auch seine Intention, über das bloße Europäertum hinauszukommen, klargestellt. Beim Studium von "Siddhartha" versuchte ich, diese geistigen Wanderungen auf die geistigen Erlebnisse Hesses und auf seine damit sich wandelnden Religionsanschauungen zurückzuführen.